

企画展 文化財の修理 ～未来に伝えるために～

- 会場 1階 松平家史料展示室
- 会期 令和4年11月26日(土)
～令和5年2月5日(日)
- 休館日 12月12日(月)・13日(火)・28日(水)
～令和5年1月4日(水)・1月23日(月)
・24日(火)

日本の文化財の多くは紙や木、絹といった有機物を素材にしています。そのため時間の経過や環境の影響を受けて劣化してしまうだけでなく、虫やカビ、災害などによって損傷してしまうことが多々あります。そこで、日本の文化財は定期的に必要な修理を行うことで、現在まで守り伝えられてきました。

当館においても、毎年少しずつ修理を行っています。各家や地域で大切に守り伝えられてきた文化財を未来へつなげつつ、研究と展示によって広く公共の利益に供するという、博物館の2つの使命「保存」と「活用」のためにも修理は欠かすことができません。

文化財の修理は表にあらわれることは多くありませんが、文化財の継承に重要な役目を担っています。本展では、近年修理した収蔵品を中心に、修理前の状態や作業の様子とともに、文化財修理について解説します。



鉄ばねと管を組み合わせた軸
橋本左内関連書翰巻子その2
(福井市春嶽公記念文庫)



絵具(胡粉)の浮き
爆竹調馬之図絵
(越葵文庫・当館保管)



袖縫い合わせ部分のほつれ
大桐花文大礼服
(越葵文庫・当館保管)



サビの発生
刀 銘 雲州藩長信
(当館蔵)

【文化財の修理】

博物館資料の修理は、現在の状態や材料などの調査をした上で修理の方針を決定します。現在の文化財修理時の方針は、現状維持が基本です。例えば絵具の褪色(色あせ)や剥落(絵具が剥げ落ちる)があっても、オリジナルの部分に絵具を描き加えるなど加筆をすることによって、作られた当時の姿に戻すといった復元は基本的に行いません。そのため、一見すると修理後も変わったようには見えないこともあります。

また、文化財の修理は一度きりではありません。これまでも100年ほどの周期で修理を行うことで、文化財は守り伝えられてきており、将来も修理が必要です。そして、未来に修理が必要になった時、現在よりも優れた修理技術や材料が開発されていたら、それを用いてより良い修理を行える状態でなければなりません。そのため、水を加えれば容易にはがすことのできる糊を接着剤に用いるなど、文化財修理では再修理が可能であるよう可逆性(元の状態に戻れる性質)があることが必要です。

【書画の修理】

古い日本の書画の多くは、絵・文字が書かれた紙や絹の基底材(本紙)の裏に数種類の紙を貼り重ね(裏打ち紙)補強して、掛軸や屏風、襖などの形(表具)に仕立てられています。書画の修理は、クリーニングをし、絵具などの剥落止め、折れや虫損部分の補修、カビの除去といった対処療法的な修理のほか、表具を解体して劣化した裏打ち紙を取り換え、表装裂を交換するといった本格修理が100年ほどの間隔で行われます。

修理前



修理後



割れた縁を接着し、欠失部分は木を継いだ。
本紙の裂傷は接着し、虫損の穴は劣化させた絹で補った。

松に鴛鴦図小襖 杉谷雪樵筆
(越葵文庫・当館保管)

【刀剣の修理】

刀身に生じたサビや曇りは研ぎ直すことで除去し、美観を取り戻します。また、刀を保存する際は、湿気によるサビの発生を防ぐため、漆塗の鞘ではなく白木の鞘(白鞘)を作り、そこに納めます。

【漆工品の修理】

漆工品は器や箱など身の回りの道具として用いられてきました。堅くて丈夫な漆工品ですが、漆は乾燥や紫外線に弱いという弱点があります。そのため、長年の使用や保存環境により割れや擦れ、亀裂が生じたり、その表面に施された蒔絵や螺鈿、金具が剥落したり浮き上がったりしてしまいます。修理ではその形を安定して維持できるように、破損・欠損部分を補修・補強し、亀裂や浮きを抑え、剥落止めなどを行います。

修理前



修理後



外れていた蓋の側板2片を膠で接着した。

九曜紋蒔絵旅櫛箱 (越葵文庫・当館保管)

※螺鈿：アワビ貝などの殻を文様に切って、漆器の表面を装飾したもの。
※金具：金・銀・錫などの金属板を文様に切って、漆面に張り付けた物。

【その他の修理】

資料の種類(古文書、歴史資料、染織など)に応じて、専門の修復研究者や職人の方と相談し、最適な修理方法を検討します。また、桐や中性紙で保存箱を製作するなど保管する環境を整えています。



中性紙の箱に、破損した元箱と新調した桐箱を同梱した。

牡丹に蝶図 種姫筆
(越葵文庫・当館保管)

※中性紙：紙面の酸性度(pH)が約6.5以上の紙。弱アルカリ性の紙も含む。

酸性紙(pH6.5以下)は、それに接触している資料にも酸が移ることによって、その資料を傷めてしまう。そのため資料を保管する封筒や箱には、中性紙のものを使用している。

主要参考文献

『漆工品の修理』(日本の美術No.451) 鈴木規夫 至文堂 2003年
『彫刻の保存と修理』(日本の美術No.452) 根立研介 至文堂 2004年
『染織品の修理』(日本の美術No.453) 河上繁樹 至文堂 2004年
『書跡・典籍、古文書の修理』(日本の美術No.480) 池田寿 至文堂 2006年
『文化財修理の最先端』京都市立博物館 2020年

次回の展示

企画展

徳川家康と息子たち

令和5年2月9日(木)~4月9日(日)

展示解説シート No.155 令和4年11月26日発行
福井市立郷土歴史博物館 〒910-0004 福井市永 3-12-1
電話 0776-21-0489 Fax 0776-21-1489
担当：藤原千穂 印刷/宮本印刷